

子どもの表現力を養う音楽科授業づくり

学籍番号 229334
氏名 楠 歩乃佳
主指導教員 澤田 和夫
副指導教員 猿谷 紀郎

1. 問題意識

筆者がこれまでに受けていた授業や、観察させていただいた実習校等で行われていた音楽の授業では、ただひたすら楽譜通りに演奏することを求められるような授業が行われていた。そのため生徒は活動に飽きている様子や、嫌気がさしている様子が窺えた。また、他者の演奏に対して興味を持つことができていない様子も見られた。このような様子は、単に楽譜通りに演奏するという目的から生じたのではないかと考えた。自分なりに曲について考え、何らかの感情やイメージを持ち、それが他者に伝わるように試行錯誤すること、すなわち表現することが必要だと筆者は思う。表現力を養う音楽科授業を行う上で、どのような手立てが必要なのかについて、筆者は疑問に感じ本研究を行うこととした。

2. 研究の目的と方法

本研究の目的は、子どもの表現力を養う授業づくりとはどのようなものなのかを明らかにすることである。研究は主に、学校実習における授業実践を通して行う。まず、表現の意味について明らかにする。次に、発展課題実習Ⅰ・Ⅱにおける授業実践をまとめる。次に、結論と考察について述べ、最後に今後の課題を述べる。

3. 研究の概要

3.1 本研究における表現の意味

ここでは、本研究における表現の意味について明らかにした。調査の結果、本研究において、音楽科授業における表現の意味は、「自分の内に感じたものを、他者に伝わるように、自身の認識を整理し、音や色などの媒体で表すこと」であると明らかになった。

3.2 発展課題実習Ⅰ（2年目前期）における実践

まず、表現力を養う音楽科授業を行う上で必要な活動として、上記の表現の意味より、

①自分の内に感じたイメージや情景を認識する活動、②感じたイメージや情景を整理し、音などの媒体で表すために工夫を考える活動、③他者に伝える活動、の3点が必要であると考え、このような活動を含む授業実践を行った。

発展課題実習Ⅰでは、中学校2年生歌唱《夏の思い出》の実践を行った。実践の結果、一部の生徒は自身の中に生じたイメージを持ち、演奏に生かそうとしている様子が見られた。一方で、活動に困難を感じていたり、歌い方の工夫を考えるところまで至らなかった生徒も多く、課題が残った。

3.3 発展課題実習Ⅱ（2年目後期）における実践

発展課題実習Ⅱでは、中学校1年生器楽《さくらさくら》の授業実践を行った。実践の結果、生徒は自身の表現したいイメージをもとに奏法の工夫を考え、演奏しようとする様子が見られた。一方で、グループワークでは数名しか協力せず、残りの生徒はしゃべっていただけ、という状況が発生したり、意見が違ったときに言い合いになってしまう様子も机間指導の中で見られ、課題が残った。

4. 結論

本研究の目的は、子どもの表現力を養う授業づくりとはどのようなものなのかを明らかにすることであった。研究の結果、以下の活動を行う必要があることがわかった。

①自分の内に感じたイメージや情景を認識する活動
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の最初に曲を聴いて感じたことを書く。 ・ワークシートの欄を、感じたことと音楽の要素の2つに分ける。
②感じたイメージや情景を整理し、音などの媒体で表すために工夫を考える活動
<ul style="list-style-type: none"> ・工夫する音楽の要素を絞る。 ・奏法の工夫について、考えたり練習する時間を十分に確保する。
③他者に伝える活動
<ul style="list-style-type: none"> ・中間発表や最終発表を行う。 ・他の班の発表は、その班の表したいイメージやその工夫について考えながら聴く。

5. 今後の課題

今後の課題は、以下の2点である。1点目は、音楽を聴いて、どのような感じがしたのか、またその理由をワークシートに記入する活動についてである。多くの生徒はどちらも書くことができていたが、全ての生徒ではなかった。授業の中で、音楽の要素とイメージが密接に関わっていることを伝えたり、子どもに体験させるなどして、継続的に実感させていくことが必要であると考えられる。2点目はグループワークの行い方である。学校生活全体を通して、互いの意見を尊重し合うことの大切さを伝える方法について、考えていきたい。